

# 地域協働教育への学生の意識

## 2015-2018年度高知大学地域協働学部新入生調査の結果から

■ 湊 邦生  
■ 辻田 宏

■ 玉里恵美子

キーワード：地域協働教育、地域協働、地域志向、地域系、高知大学

### はじめに

高知大学地域協働学部（以下「本学部」）は2018年度に第4期生62名を受け入れ、全ての学年が揃った。本稿はその第4期生に対して、入学直後に実施した調査票調査の結果を報告するものである。

この研究の主な目的は、第1に学生の入学後の成長や変化を計測する際の「原点」を定量的に記録しておくこと、第2に調査結果を広く公開し、共有することで、学生の学びの支援につなげることにある。そのために、筆者らは2015年の学部開設以来、毎年度新1年生に対し、入学時点での学部教育に関する意識や、本学部で育成を目指すさまざまな能力に関する自己評価について調査票調査を行うとともに、結果について報告を重ねてきた（湊・玉里・辻田・中澤[2016]、湊・玉里・辻田[2017]、湊・玉里・辻田[2018]）。

この研究を行う背景は、いわゆる地域志向教育を受ける側の「思い」を明らかにすること、本学部において数多く実施されている調査の成果を学生に還元することの2つが求められていることにある。これらについては、以前の報告、とりわけ湊・玉里・辻田[2018]において詳述しているので、ここでは繰り返さない。

ただし前者に関連して、地域志向教育を受ける主体である学生に着目した研究について触れておきたい。

まず、笠木・榊原・榮[2017]は地域連携授業の中で学生に配布、回収したミニッツペーパーの分析を行い、アクティブ・ラーニングの導入が学生の学習意欲の高揚をもたらし、授業改善に有効であると論じている。また、榮・榊原・笠木[2017]は地域連携教育カリキュラムの初年次科目終了時に学生アンケートを実施し、その結果から、必修科目に加えて選択科目まで受講した「主体的受講者」は、選択科目を受講しなかった「消極的受講者」と比較して、課題解決に向けた協働の意義の認識と、地域課題解決への意欲が高いこと、またその一方で、授業内で実際に協働できたかどうかの認識は協働の意義の認識ほど高くなく、かつ社会活動に参画する必要性の認識はカリキュラムが進むにつれて低まることを示した。さらに、富永[2018]は和歌山大学初年次科目「地域協働セミナー」の受講学生に対する調査結果を報告し、当該科目が和歌山に対する学生の興味・関心を高めている一方で、地域志向の教育プログラムの受講にはつながっていないと指摘している。

筆者らは前述の論文の中で、地域志向教育の多少となる学生の意識や「思い」に着目した研究がほとんど見られないことを指摘してきた。それだけに、学生の

反応に関する上記の各研究の登場は歓迎すべきものであり、地域志向教育の効果検証と言う観点からも、今後も推進すべきものと考えます。

ただし、上記研究がいずれも個別の授業に対する学生の反応を計測している点には注意を要する。榮・榊原・笠木[2017]では、個別の授業の評価の積み上げでカリキュラム評価を行うことは困難であること、カリキュラム評価のためにはより包括的な内容の計測方法をカリキュラム実施の前後に取り入れるのが効果的ではないかとの指摘がなされている。筆者らの研究では、入学直後、第3年次進級、卒業の各時点での調査を予定しており、内容も本学部での獲得目標となる各能力に関する自己評価等、学部全体に関わるものが主となっている。その点で、筆者らの調査は榮らの指摘に込め得るものと言えよう。

本稿の構成は以下の通りである。1. では2018年度に入学した第4期生を対象とする新入生調査の概要と、第4期生の基本属性について説明する。2. では各設問の集計を報告し、適宜解説を加える。3. では対象者の基本属性として、性別・出身地・入試方法に

着目し、それらと各設問の関連について、クロス表分析の結果を紹介する。4. では2. と3. の分析結果について考察を加える。以上の結果は5. でまとめられる。

## 1. 2018年度入学者調査の概要と基本属性

本学部第4期生に対する入学時調査は、2018年4月4日の新入生オリエンテーションにおいて、集合調査法で実施した。調査対象者となる第4期生は62名で、全員が調査に回答した。このうち、無効回答はQ1において2件（選択過多）しかなかったことから、全員の調査票を有効と判断した。

ここで、調査対象者の基本属性として、性別、出身地、入試方法ごとの集計結果を年度ごとにまとめたものを表1に示す。

表1で見られる通り、第4期生は第1期生、第3期生と同様に女子学生が多く、男女比はほぼ1:2となっている。他方、第4期生では県外生の比率がこれまでで最も高くなり、県内に対して3倍以上になっている。県外生の中では山陽3県（岡山、広島、山口）からの

表1 調査対象者の基本属性

		1期生		2期生		3期生		4期生	
		N	%	N	%	N	%	N	%
性別	男子	22	32.8%	30	50.0%	26	44.8%	21	33.9%
	女子	45	67.2%	30	50.0%	32	55.2%	41	66.1%
出身地	高知県内	17	25.4%	25	41.7%	17	29.3%	15	24.2%
	県外	50	74.6%	35	58.3%	41	70.7%	47	75.8%
	北海道	0	0.0%	0	0.0%	1	1.7%	0	0.0%
	東北	0	0.0%	0	0.0%	1	1.7%	0	0.0%
	関東	2	3.0%	2	3.3%	3	5.2%	3	4.8%
	甲信	0	0.0%	0	0.0%	2	3.4%	2	3.2%
	北陸	0	0.0%	0	0.0%	2	3.4%	0	0.0%
	東海	6	9.0%	3	5.0%	2	3.4%	1	1.6%
	近畿	2	3.0%	8	13.3%	9	15.5%	9	14.5%
	山陰	5	7.5%	3	5.0%	2	3.4%	4	6.5%
	山陽	7	10.4%	7	11.7%	6	10.3%	13	21.0%
	四国3県	22	32.8%	7	11.7%	10	17.2%	11	17.7%
	九州	6	9.0%	5	8.3%	3	5.2%	4	6.5%
入試方法	AO	16	23.9%	16	26.7%	15	25.9%	16	25.8%
	推薦	11	16.4%	10	16.7%	10	17.2%	10	16.1%
	一般	40	59.7%	34	56.7%	33	56.9%	36	58.1%

注：斜字は「県外」の内数を示す。

学生が最多であり、次いで四国3県（香川、徳島、愛媛）、近畿からの学生が多くなっている。他方、第3期生ほどの人数ではないにせよ、東日本からの学生も5名おり、本学部が出身地に関わらず、地域系学部・学科の志望者の関心を集めていることが伺える。

ここで見た男女比・県内／県外生比の傾向は、第2期生の男女比を除けば、第4期生のみならず、過年度の入学者にも当てはまるものである。

## 2. 集計結果および学年間比較

### 2.1. 地域協働学部を志望した背景（Q1～Q3）

新入学時の調査では、本学部を志望した背景に関して、志望理由（Q1）、志望動機に影響を与えたもの（Q2）、魅力を感じたキーワード（Q3）をたずねる設問を設けている。以下、各設問の集計結果を見ていく。

まず、Q1では志望理由を3つまで選択する形の設問である。これは第1期生調査から採っている形式であり、比較可能性担保の観点から、今年度も同じものを踏襲している。

Q1の集計結果を表2に示す。ただし、前章でも述べた選択過多の2名の回答は、集計から除外している。

ここで見られるように、「学びたい内容」（調査票では「学びたい内容を学べる」、以下同じ）「カリキュラム・教育制度」（カリキュラム・教育制度が充実している）「充実した学生生活」（充実した学生生活が送れる）という回答が特に多く、とりわけ「学びたい内容」は回答者の約8割が選択している。これらの回答が突出する傾向は第1期生から継続しており、本学部の教育に対する新入生の期待の高さを示している。

次に、表3でQ2の集計結果を示す。なお、この設問では複数回答可としている。表3が示す通り、回答が最も多いのは「パンフレット」で、特に第4期生のうち4分の3が志望動機に影響を与えたものとして選択している。次いで「ホームページ」「高校教員」との回答が多くなっている。これら3つは過年度においても他の項目より回答を集めているが、比率の変動が大きく、3つの中で特に大きな影響を与えているものが何かは判断しづらい。他方、第3期生で回答を増加させた「オープンキャンパス」が今回も同程度の回答を集めた一方、「オープンフィールドワーク」の回答が減少している。これら以外の回答は年度毎に比率の変動が著しいが、「家族」に関しては比較的に安定している。

表2 地域協働学部を選んだ理由（3つまで回答可）

	対有効回答数				対有効回答者数			
	1期生 (197)	2期生 (162)	3期生 (155)	4期生 (171)	1期生 (67)	2期生 (56)	3期生 (53)	4期生 (60)
学びたい内容	22.8%	27.2%	28.4%	<b>28.7%</b>	67.2%	78.6%	83.0%	<b>79.0%</b>
カリキュラム・教育制度	19.3%	17.9%	15.5%	<b>19.9%</b>	56.7%	51.8%	45.3%	<b>54.8%</b>
充実した学生生活	17.3%	16.7%	16.1%	<b>18.1%</b>	50.7%	48.2%	47.2%	<b>50.0%</b>
入試方法・科目	14.7%	13.0%	11.0%	<b>8.8%</b>	43.3%	37.5%	32.1%	<b>24.2%</b>
就職	10.2%	9.3%	7.1%	<b>8.8%</b>	29.9%	26.8%	20.8%	<b>24.2%</b>
偏差値	2.0%	3.1%	5.8%	<b>5.3%</b>	6.0%	8.9%	17.0%	<b>14.5%</b>
立地・環境が良い	3.6%	3.7%	8.4%	<b>4.7%</b>	10.4%	10.7%	24.5%	<b>12.9%</b>
教員・スタッフ	6.6%	3.1%	3.2%	<b>3.5%</b>	19.4%	8.9%	9.4%	<b>9.7%</b>
施設・設備	0.5%	0.0%	0.0%	<b>1.2%</b>	1.5%	0.0%	0.0%	<b>3.2%</b>
社会調査士	0.5%	0.6%	1.9%	<b>0.6%</b>	1.5%	1.8%	5.7%	<b>1.6%</b>
その他	1.0%	0.6%	0.6%	<b>0.6%</b>	3.0%	1.8%	1.9%	<b>1.6%</b>
就職・進路指導等サポート	1.0%	1.9%	0.6%	<b>0.0%</b>	3.0%	5.4%	1.9%	<b>0.0%</b>
留学制度や研修制度	0.5%	0.6%	0.6%	<b>0.0%</b>	1.5%	1.8%	1.9%	<b>0.0%</b>
学費減免・奨学金制度	0.0%	0.0%	0.6%	<b>0.0%</b>	0.0%	0.0%	1.9%	<b>0.0%</b>
クラブ・サークル活動	0.0%	2.5%	0.0%	<b>0.0%</b>	0.0%	7.1%	0.0%	<b>0.0%</b>
合計	100.0%	100.0%	100.0%	<b>100.0%</b>	294.1%	289.3%	292.5%	<b>285.0%</b>

注：カッコ内は有効回答・有効回答者それぞれの総計を示す（以後の表でも同じ）。

表3 志望動機に影響を与えたもの（複数回答可）

	対有効回答				対有効回答者			
	1期生 (223)	2期生 (196)	3期生 (199)	4期生 (226)	1期生 (67)	2期生 (60)	3期生 (58)	4期生 (62)
パンフレット	-	16.8%	15.6%	<b>20.4%</b>	-	55.0%	53.4%	<b>74.2%</b>
ホームページ	17.9%	13.3%	12.6%	<b>15.9%</b>	59.7%	43.3%	43.1%	<b>58.1%</b>
高校教員	19.3%	13.8%	18.1%	<b>11.5%</b>	64.2%	45.0%	62.1%	<b>41.9%</b>
オープンキャンパス	4.0%	8.2%	10.6%	<b>9.7%</b>	13.4%	26.7%	36.2%	<b>35.5%</b>
家族	7.2%	7.7%	6.5%	<b>6.6%</b>	23.9%	25.0%	22.4%	<b>24.2%</b>
入試要項	5.4%	7.7%	6.0%	<b>6.2%</b>	17.9%	25.0%	20.7%	<b>22.6%</b>
地域協働学部YouTubeチャンネル	-	-	4.5%	<b>5.8%</b>	-	-	15.5%	<b>21.0%</b>
新聞などの記事	4.0%	5.1%	4.0%	<b>4.0%</b>	13.4%	16.7%	13.8%	<b>14.5%</b>
その他	3.1%	6.1%	4.0%	<b>4.0%</b>	10.4%	20.0%	13.8%	<b>14.5%</b>
大学情報サイト	1.8%	2.0%	2.0%	<b>3.5%</b>	6.0%	6.7%	6.9%	<b>12.9%</b>
TVニュースなどの番組	3.1%	-	3.0%	<b>3.1%</b>	10.4%	-	10.3%	<b>11.3%</b>
オープンフィールドワーク	6.3%	4.6%	5.5%	<b>2.7%</b>	20.9%	15.0%	19.0%	<b>9.7%</b>
高知大学案内	4.0%	5.6%	3.5%	<b>2.2%</b>	13.4%	18.3%	12.1%	<b>8.1%</b>
友人	0.0%	2.0%	1.0%	<b>2.2%</b>	0.0%	6.7%	3.4%	<b>8.1%</b>
SNSによる情報	0.0%	2.6%	2.5%	<b>1.8%</b>	0.0%	8.3%	8.6%	<b>6.5%</b>
雑誌などの特集記事／雑誌などの記事	1.3%	1.0%	0.5%	<b>0.4%</b>	4.5%	3.3%	1.7%	<b>1.6%</b>
地域協働マルシェ	-	0.0%	0.0%	<b>0.0%</b>	-	0.0%	0.0%	<b>0.0%</b>
地域協働学部紹介冊子等	16.1%	-	-	-	53.7%	-	-	-
シンポジウム「地域協働で未来を拓く」	6.3%	-	-	-	20.9%	-	-	-
TV番組「ともに、未来へ」	-	3.6%	-	-	-	11.7%	-	-
合計	100.0%	100.0%	100.0%	<b>100.0%</b>	332.7%	326.7%	343.0%	<b>364.5%</b>

注：横線は当該項目が当該年度の調査で選択肢に入っていないことを示す。また、「雑誌などの特集記事」は第1期生・第2期生調査、「雑誌などの記事」は第3期生・第4期生調査での選択肢。

表4 地域協働学部で魅力を感じたキーワード（複数回答可）

	対有効回答数				対有効回答者数			
	1期生 (454)	2期生 (348)	3期生 (345)	4期生 (404)	1期生 (67)	2期生 (60)	3期生 (58)	4期生 (62)
地域活性化	10.1%	12.1%	13.0%	<b>11.9%</b>	68.7%	70.0%	77.6%	<b>77.4%</b>
地域協働	9.5%	11.5%	10.4%	<b>10.1%</b>	64.2%	66.7%	62.1%	<b>66.1%</b>
企画立案力	7.0%	8.3%	8.1%	<b>10.1%</b>	47.8%	48.3%	48.3%	<b>66.1%</b>
協働実践力	5.7%	6.3%	6.4%	<b>7.4%</b>	38.8%	36.7%	37.9%	<b>48.4%</b>
地域理解力	4.8%	4.6%	5.8%	<b>6.2%</b>	32.8%	26.7%	34.5%	<b>40.3%</b>
コミュニティ振興	5.5%	5.7%	3.2%	<b>5.9%</b>	37.3%	33.3%	19.0%	<b>38.7%</b>
地域協働マネジメント力	6.6%	4.9%	6.1%	<b>5.9%</b>	44.8%	28.3%	36.2%	<b>38.7%</b>
地域をつなぐ行政リーダー	6.6%	4.9%	5.8%	<b>5.9%</b>	44.8%	28.3%	34.5%	<b>38.7%</b>
地域の人・モノ・企業をつなぐコーディネーター	7.5%	4.6%	5.2%	<b>5.7%</b>	50.7%	26.7%	31.0%	<b>37.1%</b>
地域振興	6.8%	7.2%	6.1%	<b>5.4%</b>	46.3%	41.7%	36.2%	<b>35.5%</b>
グループワーク	7.5%	6.6%	7.2%	<b>5.2%</b>	50.7%	38.3%	43.1%	<b>33.9%</b>
6次産業化人	6.2%	6.9%	8.1%	<b>4.7%</b>	41.8%	40.0%	48.3%	<b>30.6%</b>
地域の暮らしと文化を支えるリーダー	5.5%	5.2%	2.9%	<b>4.2%</b>	37.3%	30.0%	17.2%	<b>27.4%</b>
産業振興	2.9%	3.4%	2.9%	<b>3.2%</b>	19.4%	20.0%	17.2%	<b>21.0%</b>
起業	3.5%	4.0%	4.3%	<b>2.5%</b>	23.9%	23.3%	25.9%	<b>16.1%</b>
地域協働型産業人材	2.6%	2.6%	2.6%	<b>2.0%</b>	17.9%	15.0%	15.5%	<b>12.9%</b>
サービスラーニング	1.3%	1.1%	0.3%	<b>1.5%</b>	9.0%	6.7%	1.7%	<b>9.7%</b>
学習成果報告会	0.2%	0.0%	0.9%	<b>1.0%</b>	1.5%	0.0%	5.2%	<b>6.5%</b>
その他	-	-	0.3%	<b>0.7%</b>	-	-	1.7%	<b>4.8%</b>
学年研究論文	0.0%	0.0%	0.6%	<b>0.2%</b>	0.0%	0.0%	3.4%	<b>1.6%</b>
合計	100.0%	100.0%	100.0%	<b>100.0%</b>	677.7%	580.0%	594.8%	<b>651.6%</b>

注：横線は当該項目が当該年度の調査で選択肢に入っていないことを示す。



続くQ3も複数回答可の設問である。表4に集計結果を示す。ここで第4期生の回答を見ると、「地域活性化」「地域協働」「企画立案力」という3つが選択される傾向が強い。特に「企画立案力」は回答が大幅に増加しており、在校生による企画実施が報道等で取り上げられる中で、企画立案から実現までの本学部の取り組みが魅力的に映った可能性が考えられる。このほか、第4期生調査では本学部で獲得を目指すべき「協働実践力」「地域理解力」を選択する学生が増えた一方で、「起業」を選択する学生の減少が目立っている。

## 2.2. 受講を希望する授業分野（Q4）

続いて、Q4では本学部での専門科目のうち、学生が受講を希望する科目を複数回答でたずねている。ただし、この設問では40科目が選択肢に挙げられており、それらを全て示すと煩雑になる。また、これらの科目は「地域協働マネジメント分野」「地域産業分野」「地域生活分野」という3つの分野のいずれかに属するものであり<sup>1)</sup>、筆者らの過去の研究では、これらの分野別に集計結果をまとめてきたことから、今回も同じ方法で集計を行う。図1はその結果である。

図1では、各授業の選択件数の対有効回答者比率を算出し、その結果を分野毎に積算したものを、積み上げ横棒グラフで示している。ここで第4期生の地域協働マネジメント分野の数値は295.2%となっており、

これは第4期生がこの分野の授業を1人当たり2.952科目選択したことを意味する。同様に、地域産業分野は3.113科目、地域生活分野は2.597科目、合計は8.661科目となる。また、受講を希望する授業数は第1期生（10.434科目）から第2期生（8.667科目）、第3期生（7.446科目）と減少していたのが、第4期生で増加に転じたことが分かる。

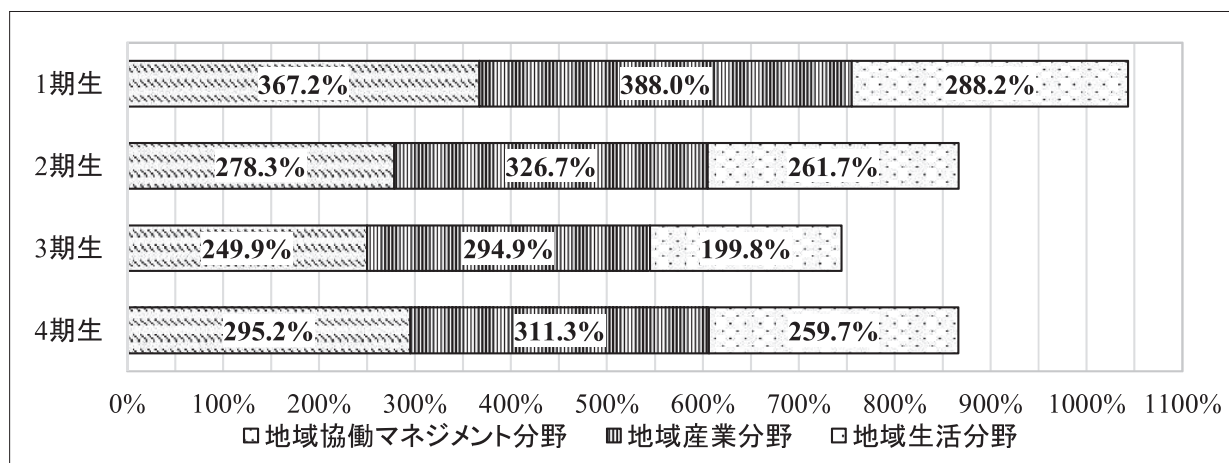
また、第1期生以来の傾向として、3分野の中では地域産業分野の数値が最も高くなっている。とはいえ、第4期生では地域協働マネジメント分野、地域生活分野の授業を選択する回答者が増えており、分野間の比率の差は小さくなっている。特に前者では「非営利組織マネジメント論」「行財政論」「起業・経営実務講座」「地域資源管理論」、後者では「コミュニティ振興論」「比較地域社会論」「生涯学習論」「ソーシャルキャピタル論」の授業の選択件数が、2倍程度、あるいはそれ以上増加している。

## 2.3. 地域協働マネジメント力の自己イメージ（Q5～Q7）

ここからは、本学部の学生が獲得を目指す地域協働マネジメント力を構成する各項目について、4件法による入学時点での学生の自己評価について見ていく<sup>2)</sup>。

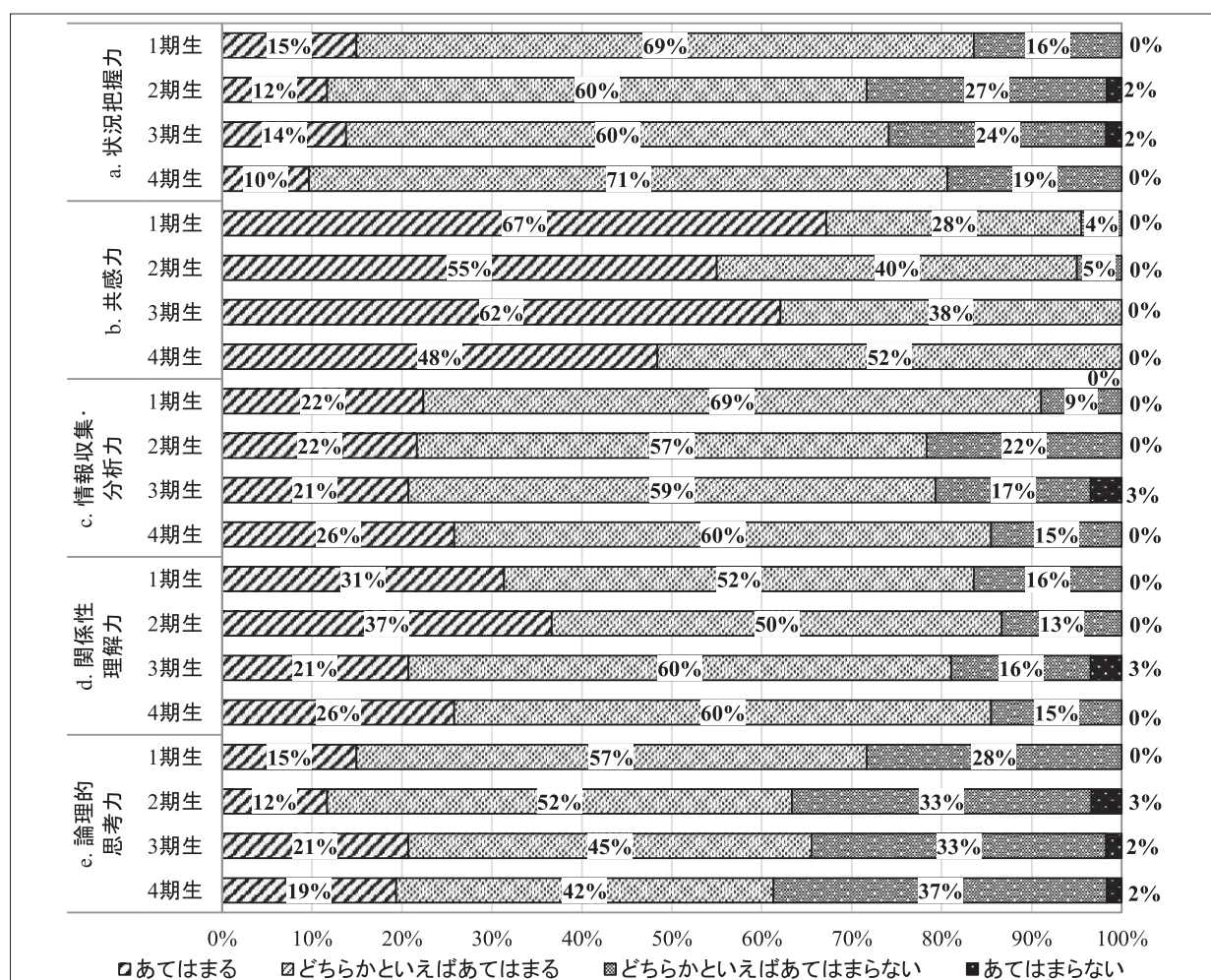
まず、図2は第1年次からの獲得を目指す「地域理

図1 受講を希望する授業（複数回答可、分野別集計）



注：グラフは分野ごとに含まれる各授業の対有効回答者比率の合計を示す。

図2 地域理解力関連項目への回答



解力」を構成する能力に関する設問（Q5）への回答である。ここから、第1期生以来第4期生まで共通する特徴として、「共感力」に対する肯定的回答の多さが見出される。逆に、あくまで相対的ではあるが、「論理的思考力」に対する否定的回答が多くなっている。

次に、第2年次の目標となる「企画立案力」の構成能力に関わる設問（Q6）について、図3に集計結果を示す。図を見る限り、「事業評価改善力」については第1期生以来分布の違いは小さい。また、第4期生に関しては「事業評価改善力」に加え、「地域課題探究力」「発想力」「事業計画力」で肯定的な回答が多い。他方、「商品開発力」「事業開発力」については否定的回答が目立っており、入学時点において商品・事業開発への関心は相対的に薄く見える。

さらに、第3年次の目標となる「協働実践力」の構

成能力に関しては（Q7）、図4に集計をまとめている。各項目を比較すると、概して「リーダーシップ：先導」「ファシリテーション力」の肯定的回答が多く、逆に「学習プロセス構築能力」は否定的回答が多い。この点は第4期生も同様である。一方で、特に第4期生に関しては「行動持続力」の肯定的回答が多い反面、コミュニケーション力の両項目では否定的回答が多くなっている。特に「自己表現」は年度が下るにつれて否定的回答が増加している点も合わせて注目される。

図3 企画立案力関連項目への回答

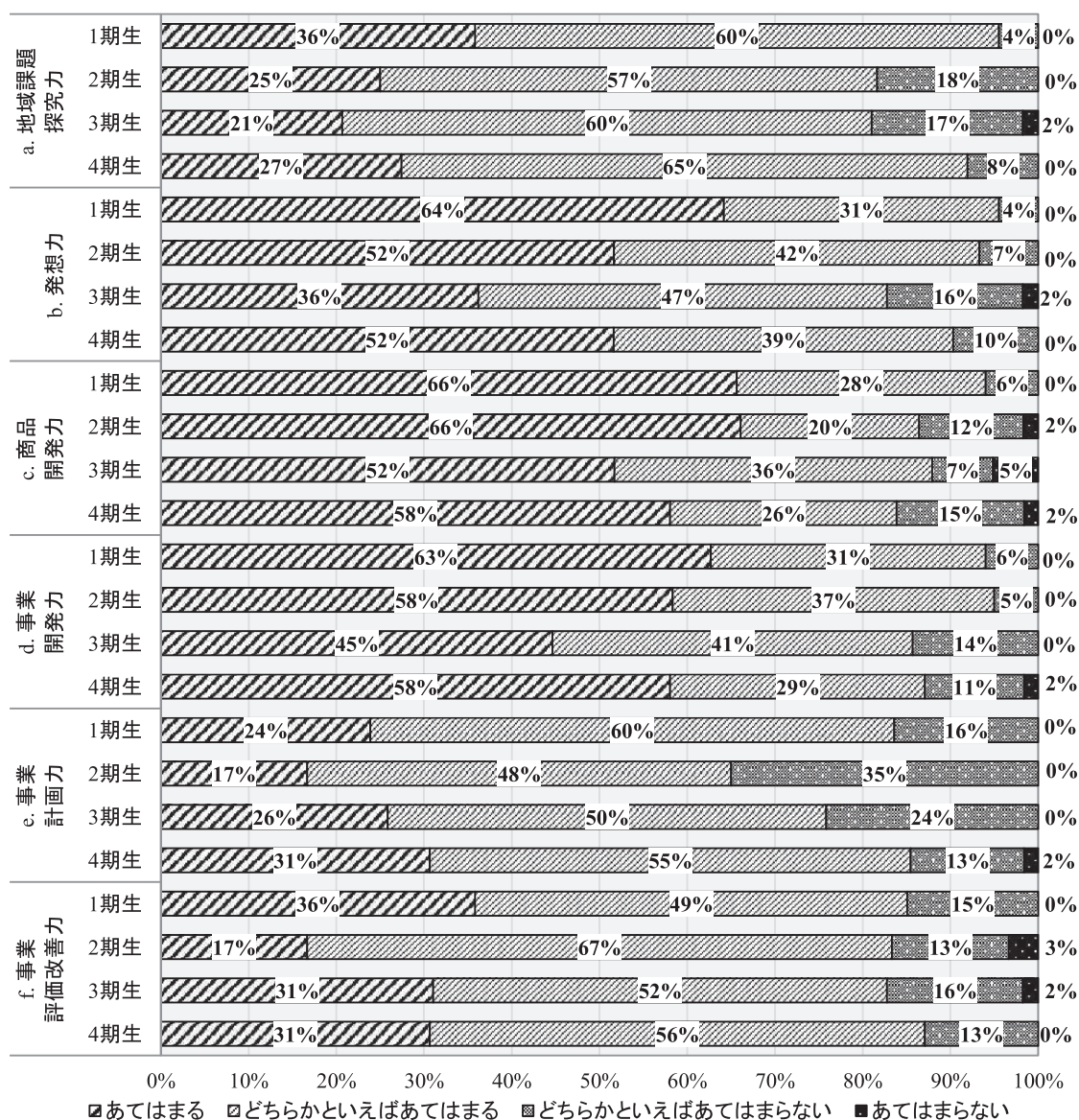
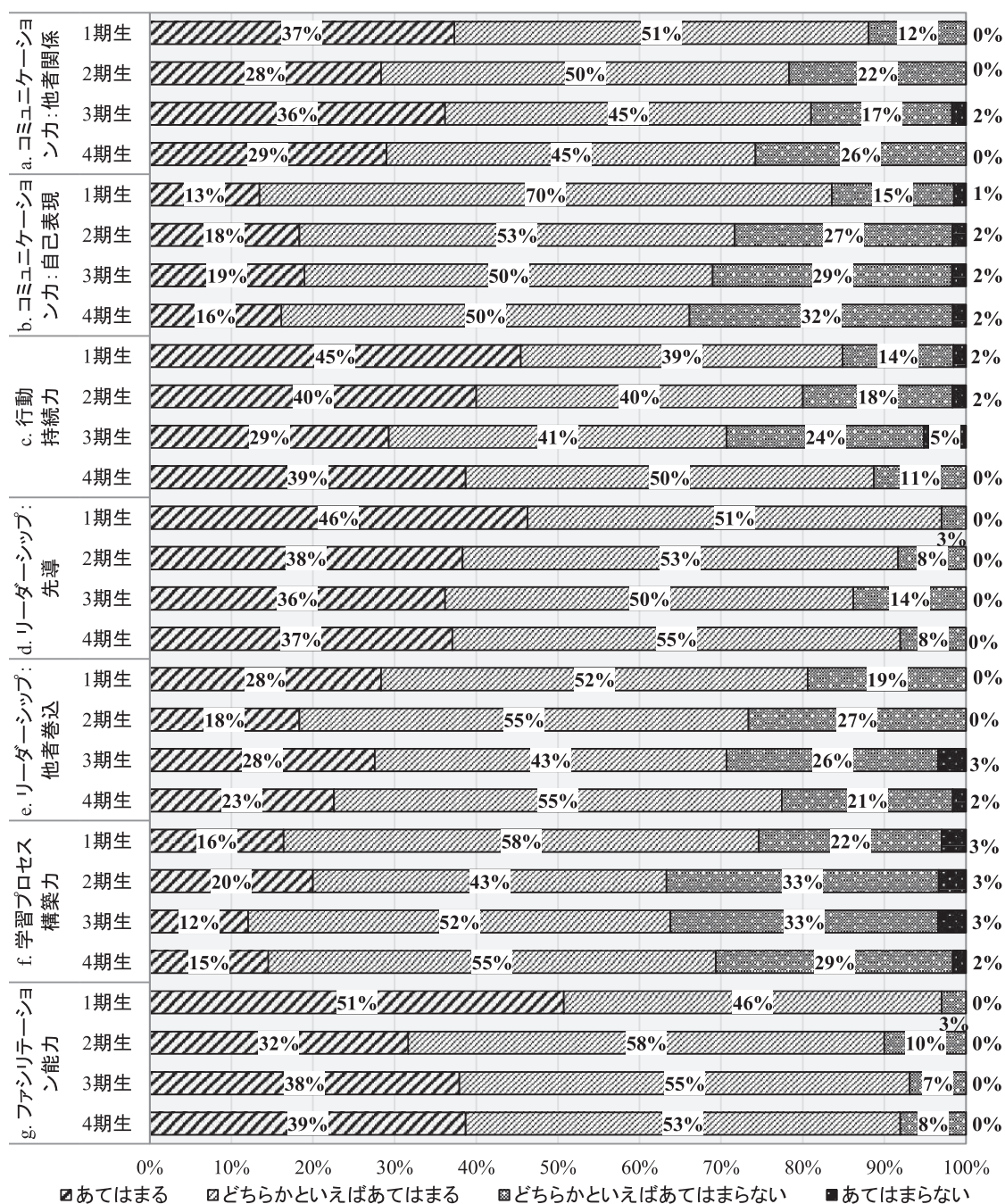




図4 協働実践力関連項目への回答



## 2.4. 入学時に描く将来像（Q8～9）

新入生調査の最後の2問では、学生の卒業後の進路に関して、Q8で仕事を選ぶ際に重視すること、Q9で将来の進路について、それぞれたずねている。

まず、前者の設問の集計を示したのが表5である。第4期生で最も回答を集めたのが「仕事内容」であり、この点は第1期生から第3期生と同様である。また、「事業や雇用の安定性」「仕事の社会的意義」との回答

の比率が上昇した反面、「職場の雰囲気」「労働時間」「能力を高める機会があること」「専門的な技能や知識を生かせること」の4つは比率が大きく下がっている。

一方、後者については表6に集計結果をまとめている。ここでは公務員を志望する回答者が大幅に増加した一方、民間企業への就職を希望する学生が10%近く減少している。また、第3期生で落ちた起業希望者の比率もほとんど回復していない。表5で示された安定



表5 仕事を選ぶ際に重視すること（複数回答可）

	対有効回答数				対有効回答者数			
	1期生 (384)	2期生 (308)	3期生 (332)	4期生 (336)	1期生 (67)	2期生 (56)	3期生 (53)	4期生 (62)
仕事内容	13.3%	13.0%	14.2%	<b>14.3%</b>	76.1%	66.7%	81.0%	<b>77.4%</b>
収入	11.5%	13.0%	11.7%	<b>12.2%</b>	65.7%	66.7%	67.2%	<b>66.1%</b>
職場の雰囲気	12.0%	9.4%	12.7%	<b>10.7%</b>	68.7%	48.3%	72.4%	<b>58.1%</b>
自分の好きなことや趣味を生かせること	8.6%	9.4%	9.0%	<b>9.8%</b>	49.3%	48.3%	51.7%	<b>53.2%</b>
社会に対する貢献	8.1%	10.1%	7.8%	<b>8.9%</b>	46.3%	51.7%	44.8%	<b>48.4%</b>
事業や雇用の安定性	7.0%	8.1%	6.6%	<b>8.0%</b>	40.3%	41.7%	37.9%	<b>43.5%</b>
自分を生かすこと	9.6%	7.5%	7.2%	<b>7.7%</b>	55.2%	38.3%	41.4%	<b>41.9%</b>
労働時間	4.7%	7.1%	8.1%	<b>7.1%</b>	26.9%	36.7%	46.6%	<b>38.7%</b>
将来性	7.8%	6.2%	6.3%	<b>6.5%</b>	44.8%	31.7%	36.2%	<b>35.5%</b>
仕事の社会的意義	4.7%	4.9%	4.8%	<b>6.3%</b>	26.9%	25.0%	27.6%	<b>33.9%</b>
能力を高める機会があること	4.9%	3.9%	5.1%	<b>3.9%</b>	28.4%	20.0%	29.3%	<b>21.0%</b>
通勤の便	2.9%	3.9%	2.7%	<b>2.4%</b>	16.4%	20.0%	15.5%	<b>12.9%</b>
専門的な技能や知識を生かせること	4.2%	3.2%	3.3%	<b>2.1%</b>	23.9%	16.7%	19.0%	<b>11.3%</b>
その他	0.8%	0.3%	0.3%	<b>0.0%</b>	4.5%	1.7%	1.7%	<b>0.0%</b>
合計	100.0%	100.0%	100.0%	<b>100.0%</b>	573.4%	513.3%	572.4%	<b>541.9%</b>

表6 将来就きたい職種（単一回答）

	1期生(63)	2期生(55)	3期生(58)	4期生(62)
公務員	55.6%	52.7%	46.6%	62.9%
企業	15.9%	23.6%	27.6%	17.7%
自分で起業する	14.3%	14.5%	8.6%	9.7%
その他	6.3%	5.5%	10.3%	4.8%
非営利団体、団体職員	7.9%	1.8%	5.2%	1.6%
大学院進学	0.0%	0.0%	1.7%	1.6%
家業のあとつぎ	0.0%	1.8%	0.0%	1.6%

性を求める学生の増加を合わせて考えると、新入生が現時点で卒業時の就職状況を厳しく捉えていることが示唆される。

### 3. 属性との関連

前項まで見てきた集計結果について、それぞれ単純クロス表分析により、回答者の基本属性として、性別・出身地・入試方法との関連を分析した。なお、本稿では湊・玉里・辻田[2018]同様、分析ごとにクラメールの連関係数Vを算出し、 $V \geq .250$ となるものについて顕著な関連があるとみなすこととした。それらの関連について、概要を表7に示す。

まず性別についてみると、過去4回の調査でいずれも「将来就きたい職種」と顕著な関連が見られており、第4期生調査では係数Vが最も高くなっている。ただし、図5が示す通り、第1期生から第3期生までは男子学生の公務員志望が強かったのが、第4期生では女子学生の志望が急増して逆転している点は注意を要

する。とはいえ、他の項目については、おおむね一貫した傾向を見出すことができる。

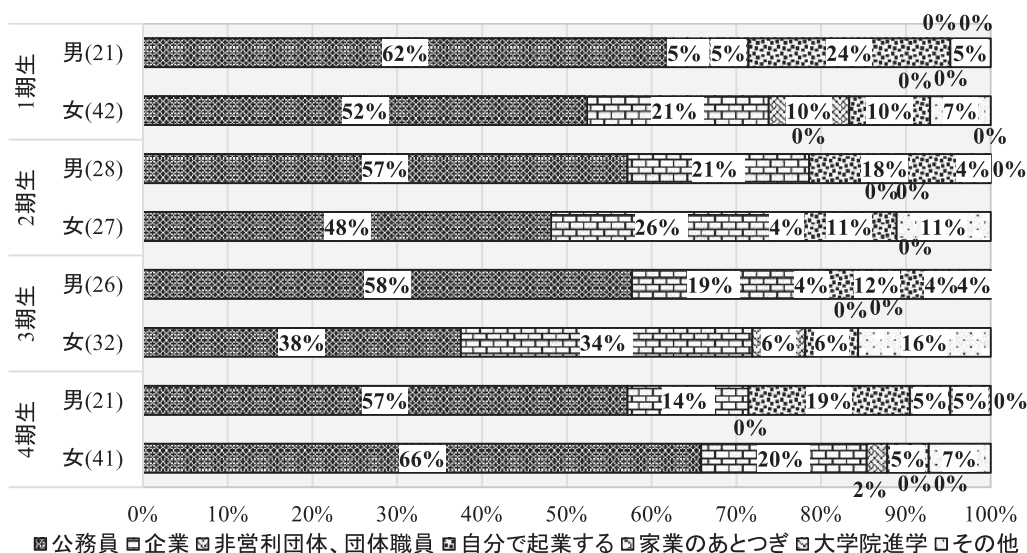
また、出身地の違いについては、第1期生以来一貫して関連が見られるものはない。他方、入試方法については、性別・出身地と比較して関連を示す項目の数がはるかに多くなっている。それらの項目のうち、「オープンキャンパス」「オープンフィールドワーク」は第1期生以来入試方法との関連が示されており、注目される。ここで表8を基に、第1期生から第4期生に見られる関連を検討すると、オープンキャンパスはいずれにおいてもAO入試への出願と合格に結びついている。一方で、オープンフィールドワークについては、第1期生から第3期生までは推薦入試への出願と合格に、第4期生に関してはAO入試出願・合格に結びついている。以上のように入学年度によって差異はあるが、オープンキャンパスとオープンフィールドワークが早期の出願を促しているとは言えよう<sup>3)</sup>。

表7 各設問への回答と性別・出身地・入試方法との関連

性別	V	県内・県外	V	入試方法	V
Q9: 将来就きたい職種	.386	Q5e: 論理的思考力	.484	Q2: オープンキャンパス	.634
Q5d: 関係性理解力	.341	Q2: オープンキャンパス	.447	Q4: ソーシャルキャピタル論	.516
Q6e: 事業計画力	.305	Q2: その他	.409	Q4: コミュニティ振興論	.438
Q8: 職場の雰囲気	.290	Q8: 仕事の社会的意義	.391	Q3: 企画立案力	.426
Q4: 会計学概論	.289	Q4: 地域福祉論	.384	Q2: その他	.422
Q4: 金融・税務実務講座	.289	Q4: コミュニティ振興論	.380	Q5b: 共感力	.421
Q1: 偏差値	.286	Q5b: 共感力	.357	Q3: 地域理解力	.415
Q8: 事業や雇用の安定性	.285	Q3: 地域協働型産業人材	.344	Q3: グループワーク	.362
Q8: 専門的な技能や知識を生かせること	.283	Q9: 将来就きたい職種	.340	Q8: 社会に対する貢献	.326
Q7f: 学習プロセス構築力	.282	Q3: 企画立案力	.325	Q3: 地域の暮らしと文化を支えるリーダー	.325
Q3: 企画立案力	.280	Q4: 家庭経営学	.312	Q4: ダンス	.320
Q2: パンフレット	.279	Q2: 新聞など記事	.302	Q3: サービスラーニング	.318
Q7e: リーダーシップ: 他者巻込	.268	Q4: 地域防災論	.302	Q7a: コミュニケーション力: 対他者関係	.303
Q3: 地域の人・モノ・企業をつなぐコーディネーター	.267	Q4: 地域生活と女性	.296	Q4: 地域防災論	.303
Q4: 経営組織論	.266	Q8: 自分を生かすこと	.283	Q3: コミュニティ振興	.302
Q5e: 論理的思考力	.262	Q5a: 状況把握力	.283	Q4: 地域デザイン論	.294
Q6d: 事業開発力	.258	Q3: 協働実践力	.282	Q8: 自分の好きなことや趣味を生かせること	.294
Q5a: 状況把握力	.256	Q4: ダンス	.274	Q8: 能力を高める機会があること	.293
Q6f: 事業評価改善力	.255	Q3: 地域の人・モノ・企業をつなぐコーディネーター	.268	Q1: その他	.292
Q1: 施設・設備	.255	Q7b: コミュニケーション力: 自己表現	.263	Q2: 雑誌など特集記事	.292
Q4: 国際ビジネス展開論	.253			Q4: 六次産業化論	.288
				Q1: カリキュラム・教育制度	.287
				Q4: 非営利組織マネジメント論	.285
				Q8: 仕事の社会的意義	.281
				Q3: 地域協働	.281
				Q4: 地域福祉論	.277
				Q2: オープンフィールドワーク	.275
				Q9: 将来就きたい職種	.274
				Q4: 実践情報処理	.273
				Q1: 偏差値	.273
				Q8: 自分を生かすこと	.272
				Q8: 職場の雰囲気	.268
				Q3: 地域活性化	.265
				Q8: 将来性	.257
				Q4: 起業・経営実務講座	.253
				Q3: 地域の人・モノ・企業をつなぐコーディネーター	.251

注：太字は過去4回の調査全てで、斜字は3回で、それぞれV≥.250となった項目を示す。

図5 将来希望する職種・進路と性別との関連



#### 4. 考察

前項までで、各設問の回答の集計結果と属性との関連について見てきた。ここではそれらの結果と過去の調査結果を基に、本学部学生の一般的傾向や、第4期生にとりわけ見られる特徴について、若干の考察を加えてみたい。

このうち前者については、湊・玉里・辻田[2018]で示された第3期生までの特徴のうち、第4期生において確認されたものがあつた。具体的には以下の4点である。第1に、カリキュラムや教育制度・内容に加え、学部紹介の冊子体、高校教員、オープンキャンパスが志望動機に対して特に影響を与えている。第2に、本

表8 オープンキャンパス・オープンフィールドワークと入試受験との関連

1期生							2期生				
		AO	推薦	一般	合計		AO	推薦	一般	合計	
オープン キャンパス	選択	N	6	2	1	9	8	6	2	16	
		%	66.7%	22.2%	11.1%	100.0%	50.0%	37.5%	12.5%	100.0%	
	非選択	N	10	9	39	58	8	4	32	44	
		%	17.2%	15.5%	67.2%	100.0%	18.2%	9.1%	72.7%	100.0%	
オープン フィールドワーク	選択	N	6	7	1	14	3	5	1	9	
		%	42.9%	50.0%	7.1%	100.0%	33.3%	55.6%	11.1%	100.0%	
	非選択	N	10	4	39	53	13	5	33	51	
		%	18.9%	7.5%	73.6%	100.0%	25.5%	9.8%	64.7%	100.0%	
3期生							4期生				
		AO	推薦	一般	合計		AO	推薦	一般	合計	
オープン キャンパス	選択	N	8	7	6	21	13	5	4	22	
		%	38.1%	33.3%	28.6%	100.0%	59.1%	22.7%	18.2%	100.0%	
	非選択	N	7	3	27	37	3	5	32	40	
		%	18.9%	8.1%	73.0%	100.0%	7.5%	12.5%	80.0%	100.0%	
オープン フィールドワーク	選択	N	3	6	2	11	3	2	1	6	
		%	27.3%	54.5%	18.2%	100.0%	50.0%	33.3%	16.7%	100.0%	
	非選択	N	12	4	31	47	13	8	35	56	
		%	25.5%	8.5%	66.0%	100.0%	23.2%	14.3%	62.5%	100.0%	

学で育成を目指す能力のうち、企画立案力が人気を集めている。第3に、共感力・事業評価改善力・リーダーシップ：先導とファシリテーション能力について肯定的回答の比率が相対的に高い一方、論理的思考力、リーダーシップ：他者巻込、学習プロセス構築力については肯定的回答の比率が下がる。第4に、オープンキャンパス参加者の多くはAO入試の受験、合格により入学している。ただし、第3期生まではオープンフィールドワークが推薦入試受験を促していたが、第4期生も含めると、AO入試も含めた早期入学につながったと考える方が妥当となる。加えて、女子学生・県外生のシェアの大きさも定着した感がある。

また、第4期生の特徴について見ると、第2期生・第3期生で見られた「大人しさ」(湊・玉里・辻田[2017]、湊・玉里・辻田[2018])が目立たなくなった点が注目される。第2期生・第3期生は第1期生と比べると、Q3のキーワードやQ4での授業の選択数が少なく、逆にQ5からQ7で否定的回答の比率が高い傾向が見られたほか、特に第3期生ではQ9で志望進路未定の学生が目立った。ところが、第4期生はQ4での選択数は第2期生、Q9での志望進路未定の学生数こそ第3期生と同程度なものの、Q3の選択数は第1期生に

次いで多い。また、Q5からQ7の否定的回答も、第2期生または第3期生と比較して減少した項目が多い。第2期生、第3期生については自己評価の低さが懸念されたが、第4期生に関しては、その懸念が概して後退したと言い得る。このほか、Q2については選択数が過去最高となっており、これまでの学生よりもさまざまな情報源に積極的に触れていることが示唆される。

とはいえ、注意点もある。Q5eの論理的思考力に関しては、否定的回答の比率が第4期生で最も高くなっている。加えて、前項までで見た商品・事業サービスへの関心の相対的低さ、コミュニケーション力の否定的回答の多さも看過することはできない。

以上の結果と、過去の調査からの議論を基に、本学部での学生の確保と入学後の指導について、以下のことが言い得る。まず、学部PRに関しては湊・玉里・辻田[2018]での議論をあらためて考慮する必要がある。つまり、紙媒体・対面によるPRが効果を上げているとはいえ、全国に散在すると思われる潜在的な本学部志望者に対し、在籍する高校に直接赴くことも、オープンキャンパスへの参加を促すのも現実的とはいえない。ゆえに、インターネットによる発信力の向上、



とりわけ SNS による発信のてこ入れが重要となる。

また指導に際しては、分析的・論理的な理解力の獲得と、学習習慣の確立が引き続き課題となる。特に第4期生に関しては、他者との関係構築から自らの活動への引き込みに関わる能力育成についての支援を、特に考慮する必要がある。さらに、2年次の実習活動や授業履修を考えれば、商品・事業開発に対する関心醸成も課題となる。

以上はあくまでも一般的傾向を示すものであり、実際には個々の学生に合わせた対応が求められることは言うまでもない。しかし、ある程度の傾向を知っておくことで、支援・指導の方向性やポイントを見定めておくことは有益であろう。

## 5. まとめ

本稿では、本学部第4期生に対して入学直後に行った調査結果と過去の調査の結果から、本学部新入生の一般的な傾向について検討してきた。その中で、女子学生・県外生の多さ、共感力・事業評価改善力・先導能力とファシリテーション力という「強み」と、論理的思考、他者の巻き込み、学習プロセス構築という点での「弱み」をあらためて確認することができた。加えて、第4期生は第2期生・第3期生のような「大人しさ」が目立たない一方で、上記の「弱み」に加えコミュニケーション力や商品・事業開発への関心をどう促成するかが課題となることが明らかとなった。

本稿で報告した入学時調査は、第5期生以降も行う予定である。また、在校生に対しては第3年次進級時、卒業時にも同様の設問からなる調査を実施することになっており、前者は既に始まっている。これらの実施と結果の蓄積によって、本稿を含む既存の議論に修正が求められる場面が今後出てくることも予想される。そのような修正点も含め、成果を発信していくことは、学生の学びの支援やケアのための基礎情報を共有することにもつながる。既存データのより詳細かつ多角的な分析も含め、今後の課題としたい。

注

1) 40科目のうち、地域産業分野には「経済学入門」「地域デザイン論」「フードビジネス論」「六次産業化論」「農業振興論」「地域産業政策論」「国際ビジネス展開論」「食品生化学」「森林経営学」「地域産業連関論」「中心市街地活性化論」「国際農林水産物市場論」が、地域協働マネジメント分野には「組織学習論」「地域計画論」「非営利組織マネジメント論」「経営組織論」「地域資源管理論」「行財政論」「会計学概論」「社会教育論」「起業・経営実務講座」「行政実務講座」「金融・税務実務講座」「実践情報処理」「外国語特別演習」「海外特別演習」が、地域生活分野には「生涯学習論」「地域スポーツ振興論」「環境社会学」「ダンス」「地域スポーツ社会学」「地域福祉論」「コミュニティ振興論」「地域防災論」「比較地域社会論」「ソーシャルキャピタル論」「非営利組織論」「環境文化論」「家庭経営学」「地域生活と女性」がそれぞれ含まれる。

2) 地域協働マネジメント力とその構成能力については、国立大学法人高知大学地域協働学部(n.d.)を、各項目の設問文は湊・玉里・辻田[2018]をそれぞれ参照。

3) ここでの「入試方法」とはあくまで回答者が実際に入学した際の方法である。したがって、「一般入試」オープンキャンパスないしオープンフィールドワークに参加して本学への志望を決め、AO・推薦入試を受験したものの、結果として一般入試で入学した学生が含まれる可能性がある。その場合、オープンキャンパスないしオープンフィールドワークがAO・推薦入試出願を促す効果は、表7で示されているよりも大きくなることが考えられる。

## 参考文献

笠木秀樹、榊原勝己、榮久美子[2017]「アクティブ・ラーニングによる大規模講義科目の授業設計と評価 ― 地域連携授業における実践 ―」『岡山県立大学教育研究紀要』2(1): 71-81。

国立大学法人高知大学地域協働学部[n.d.]「カリキュ

ラム」『国立大学法人高知大学地域協働学部』2018年  
9月11日最終アクセス、<http://www.kochi-rc.jp/curriculum/>

湊邦生、玉里恵美子、辻田宏、中澤純治[2016]「地域  
協働教育への学生の意識～高知大学地域協働学部第  
1期生調査の結果から」『高知大学教育研究論集』20:  
25-33。

湊邦生、玉里恵美子、辻田宏[2017]「地域協働教育に  
対する学生の意識の動向～高知大学地域協働学部第  
2期生・第1期生調査の比較～」『高知大学教育研究  
論集』21: 1-12。

湊邦生、玉里恵美子、辻田宏[2018]「『地域協働』を志  
望する学生像—高知大学地域協働学部新入生アン  
ケートに対する第1期・第2期・第3期学生の回答  
結果からの検討—」『Collaboration: 高知大学教育研  
究部総合科学系地域協働教育学部門研究論集』8:  
73-84。

榮久美子、榊原勝己、笠木秀樹[2017]「地域連携教育  
カリキュラム「岡山創生学」における学習意欲の違  
いが学びの成果に及ぼす影響」『岡山県立大学教育  
研究紀要』2(1): 25-36。

富永哲雄[2018]「地域志向教育の教育効果と課題に関  
する一考察：わかやま未来学副専攻を事例として」  
『大学地域連携研究 = Collaboration & Community  
Development：地域と大学を繋ぐコーディネーター  
ネットワーク構築事業』5: 43-50